

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	甲	第	号
------	---	---	---	---

氏 名 鈴木 克尚

論 文 題 目

Comparison of quality of life and psychological distress in patients with tongue cancer undergoing a total/subtotal glossectomy or extended hemiglossectomy and free flap transfer: a prospective evaluation

(遊離組織移植を伴う舌全摘/亜全摘または舌拡大半側切除を行った患者の、生活の質と精神的苦痛を前方視的に評価した研究)

論文審査担当者 名古屋大学教授

主 査 委員 池田 匡志
名古屋大学教授

委員 亀井 讓
名古屋大学教授

委員 長縄 慎二
名古屋大学教授

指導教授 曾根 三千彦

論文審査の結果の要旨

今回、進行舌癌患者の術前から術後 12 か月までの、Quality of Life (以下、QoL) と精神的苦痛を経時的に評価し、舌全摘/亜全摘を行った患者群と舌半側切除を行った患者群を比較した。結果、術後 12 か月において、前者の QoL 指標の一部および抑うつ状態が後者よりも悪かった。また、今回用いた QoL 指標は、国民標準との比較も可能で、後者の術後 12 か月時点の QoL スコアが国民標準と遜色ないのに対し、前者の QoL スコアは、疼痛以外のほとんどの項目が国民標準より有意に低いことがわかった。再建を伴う舌切除術、とくに全摘/亜全摘を行う患者に対しては、腫瘍再発に関するフォローの他、生活の質（嚥下や構音など）や精神科的なフォローも重要であることが示唆された。

本研究に対し、以下の点を議論した。

- 1.舌全摘・亜全摘群が、舌半側切除群よりも、術後 12 か月時点の抑うつスコアが高く、とくに前者において早期からの精神科的介入（面接や薬物治療）が重要であると結論した。今後、もし可能ならば、精神科的介入の有無の 2 群に分けて比較することが望ましい。
- 2.過去の文献においては、構音のスコアが低いほど不安が高いという報告があった。本研究では、精神的苦痛と QoL の関連を検討できるほどの症例数を得られず、症例の集積が望まれる。
- 3.根治性を担保しつつ、患者の QoL 低下を最小限に抑える方法を探索することが重要である。海外の施設では、epidermal growth factor receptor (EGFR) を用いた蛍光ガイド下手術の研究が進められている。

以上の理由により、本研究は博士（医学）の学位を授与するに相応しい価値を有するものと評価した。

試験の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号	氏 名	鈴木 克尚
試験担当者	主査 池田 匡志		副査 ₁ 亀井 譲	
	副査 ₂ 長縄 慎二		指導教授 曾根 三千彦	
(試験の結果の要旨)				
<p>主論文についてその内容を詳細に検討し、次の問題について試験を実施した。</p> <ol style="list-style-type: none">1. 舌がん再建手術と精神的介入の関連について2. 抑うつ、不安、嚥下、構音の関連について3. 半側切除してから、遺残腫瘍を放射線治療するなどの治療法について <p>以上の試験の結果、本人は深い学識と判断力ならびに考察力を有するとともに、耳鼻咽喉科学一般における知識も十分具備していることを認め、学位審査委員合議の上、合格と判断した。</p>				